

「人間の死と脳幹死」

Christopher Pallis 著

植村研一, 中谷比呂樹, 西川正郎 訳

厚生省医務局医事課 監修

東京大学助教授

岩 田 誠

ある時積尊のもとへわが児に与える薬を求めに来た女があった。女は腕の中の幼児が既に死んでいるのに気づいていなかった。積尊は女に、“昔より、かつて一度も死者を出したことの無い家からケン粒をもらってきて児に与えよ”と教えられた。女は死んだわが児を抱いて家々を訪ね歩き、ついに死とはいかなるものかを悟るに至って、初めて愛児が死んでいるということに気がついたという。積尊が愛児の死んでいることを直接告げられなかったのは、女に対する憐憫の情からということもあるが、それ以上に、死を理解するに至る過程を重視されたために違いあるまい。かように、“死”は人間の事象のうちでも最も普遍的かつ日常的なものでありながら、それを本当に理解することは容易なことではない。目前に繰り返される死を何度となく経験することによって初めて死を真に理解するに至る、という時間的経過が必要なことは、現代においてもなら変わることがない。

近年、わが国でも脳死に対する論議がしばしば大きく取り上げられているが、その多くは、臓器移植との関連においてか、または、いわゆる尊厳死をめぐる問題として取り上げられるかである。しかしこれらの視点から論ぜられるとき、脳死の認識とその判定の問題は、しばしば“死

を認識すること”ではなく、“死なせること”についての議論となってしまう。

本書の原題(“ABC of Brain Stem Death”)に対し「人間の死と脳幹死」という題を選ばれた訳者達は、原著者 Christopher Pallis 博士の真意を実に見事に訳されたと思う。本書は、脳死の判定についての正しい理解を、主として一般医向けに、平易に、しかし厳密に科学的な方法に従って説いたものである。訳書では、更に一般読者のための解説がつけ加えられており、医師以外にも、広くパラメディカルの人々、医学生、そして一般読者にも、理解しやすいように細やかな配慮がなされている。また、付録として幾つかの資料が収められている点からも、訳者達の心くばりを十分にうかがうことができる。

本書で最も強調されていることは、積尊を訪ねて、死児に与える薬を乞うた女と同じ状態にある人々に、脳幹死はもはや完全な死であり、そのような患者に人工呼吸器を装着することは“死体を換気すること”にほかならぬこと、そしてそのような脳幹死の確実な診断は、ベッドサイドにおいて十分に、かつ精確に成しうることを明らかにすることである。著者は、確実な死と認めうる非可逆的脳幹死と、植物状態や一

時的な脳幹の機能障害とを厳密に識別し、少しでも疑いの残るものは判定の対象とはしないという考えを明確にしているが、その目指すところは、死に直面していながらそれと気づかず、痛ましい処置を継続しようとする者に真実を理解させようということであると同時に、疑いの余地のある患者のための徹底した保護策でもある。すなわち、いかなる場合には脳幹死の判定を下してはならないかを明確に述べていることからわかるように、著者はあくまでも、昏睡にある患者の側に立った脳死の判定を問題にしているのである。

このように、本書はいわゆる脳死の理解と科学的根拠に基づくその判定方法について詳しく知るためにかけがえのない価値を持っているが、著者の提起した問題はそれのみにとどまるものではない。本書を全体として読んでゆくと、死の概念そのものに対する、より広範な理解がいかに重要であるかという点が浮きぼりにされてくる。著者は、今日の死の概念の認識が、一方では“既に死体と化している人体をあたかも生者のごとく扱う”段階から、“精神活動のない人間をあたかも死者のごとく扱う”段階までの間で揺れ動いている事実を鋭く指摘し、その間でうまく舵をとることの必要性を説いている。

本文わずか70ページに満たない本書を読み終えたあとの、このずっしりとした読みごたえは、死について考えることのある人々が、必ず読むべきものとしての本書の価値を、まざまざと感じさせてくれる。

B5判 88頁 図18 写真5

カット34 1984 ¥2,900 ㊦250

医学書院 刊